

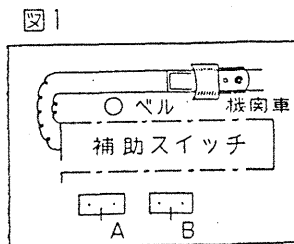
児童の伝達に関する一実験

西京大学

西田香代子

児童は、課題解決学習の結果をいかに相手に説明するか、またそれを聞いて、どの程度理解することが出来るか考察した。

【実験装置】は図一。前列に切りかえスイッチA Bが並びスイッチは、それぞれ左右どちらにも入れることが出来る。補助スイッチは、実験者が実験系列の度毎に操作して、回路を変えるためのものである。



被験児童

各群10名

	1	5	3	6	7
MA	6:0	6:0	7:0	6:0	11:7
CA	6:0	7:0	7:0	12:0	11:2
IQ	100	118	97	51	96

児童が、スイッチA Bを、おのおの正しく入れた時ベルが鳴るようになっていた。

【被験児童】一、三、五群は同一地区の小学校、保育所、六群は精薄施設、七群は養護施設の児童。

【実施期間】昭和三年九月〜三年二月。

【実験手続】被験児は毎回二人を一組とし、電気の回路操作経験の有無を尋ね、無いことを確める。まず児童aに課題を解決させ、解決後スイッチA Bをおおい、児童bに解決方法をことばで説明させる。bはaの説明にしたがってベルを鳴らす。児童aがスイッチを覆ったまま、一分たっても説明出来ない時は、覆いを除き、説明させる。この両児童の言語動作を記録する。次はa bの児童を交替させる。

【結果】児童が説明した場面、説明に使用した手段、説明の正確さ、説明に不必要な言語、品詞、理解の程度などについて各群を比較したところ、聞いて理解する力は年令と共に増し、また経験がある方が増している。しかし、六、七才児と、一才児では著しい差がみられた。六、七才児が説明しているのに、聞き手の理解が不十分なのは、話し手の表現力の不十分なこと、特に助詞の省略が多く、代名詞の使用が不明瞭であり、更に相手は自分同様知っているであろうという自己中心の態度から生ずる。相手に判らせようとする意欲が少ない点、また聞き手も十分理解しないうちに行動する態度が影響していると思われる。この実験では、MAが大きく作用していると思われるが、どの程度の割合で、MA、CAが関係するかは、まだ明らかとならなかった。